

抗父氏の記して居るやうに、李氏は前記第五種の景典なる宣元至本經をも藏して居られるが、これは自分の訪問の當時には上海に置いてあるとのことで、遺憾ながら見ることを得なかつた。但し氏の言に據ると、其の經は唯だ二三十行の文字を有するに過ぎず、細闇を劃した長い餘白を存して居り、文字の終は句として完結して居るけれども、果して全卷の終りであるか否かは不明であるとのことである。多分中途にして抄寫を廢めたものであらう。かかる次第で、今學界に知らるゝ五種の景典中、一種のみはなほ世に公けにするを得ないが、茲にその第四種と稱すべきこの遺經を同學の士に頒ち得るのは、自分の深く欣快とする所である。

二 體 裁

此の經典は敦煌出土の經卷に多く用ゐらるゝ黃麻紙に書かれ、上下と行間とには細闇が施されてある。首行と第二百五十九行に當る末尾の行とには、前述の如く志玄安樂經と題し、首尾完結してゐるが、唯だ初めの十行だけは下半部を殘缺して居る。字體は一神論や序廳迷詩所經とは趣を異にし、それと比べて稍々硬さと太さを増し、寧ろ三威蒙度讚のそれに近いと見受けた。勿論精細にこの點を論議するについては、せめて原本の寫眞をでも示し得る日を待たねばならぬが、自分の觀た所にして過らなければ、此の經卷の書寫は一神論や序廳迷詩所經よりも後の時代に屬するもので、此等の兩者が景教傳來の後比較的早い時代に選述せられ、其の書寫も殆ぼ初唐の時期に屬するものと認めらるゝに對して、これは蒙度讚後附の經目にも見える通り、有名なる景淨の譯述に係ると言はれ、其の文體も略ぼ整ひ、假令解し難き文句一二に止まらないとはいへ、然も意義殆んど通達する點から見ても、前の兩者に